4．特別教室棟の建築と門柱の建立

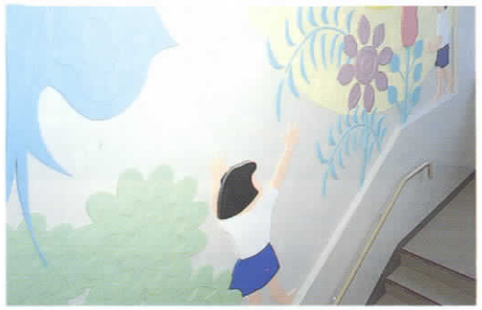
平成７年(1995)３月に特別教室棟及び屋外設備(通路駐車場をアスファルト舗装、シャワー室や灯油庫の新設）が完成した。

特別教室棟は、多目的ホール・多目的室・保健室・理科室・視聴覚室・音楽室・図工室・休憩室・教材室を含む近代的な建物である。

門柱は、「安全・優しさ・平和・心のふるさと」の願いをこめて丸みのある形にし、両門柱の傾斜した部分に「世界に向かって羽ばたく雄姿」を願って形を決定(右側に名称、左側に校章)。インターブロッキングは、大歳の象徴「椹野川」と子供たちの幸せを願い『クローバー模様』にした。

門柱

新校舎時計台



新校舎階段壁画

新校舎階段壁画

新校舎多目的ホール

新校舎理科室

（執筆　福重悦子）

第４章　地域の社会活動

懸命にバチを振るう「大歳太鼓」サークル

大歳小学校ＰＴＡ活動について

ＰＴＡ会長　多　田　宏　之

１．大歳小ＰＴＡの誕生

わが国のＰＴＡ（Parent-Teachers-Association）の誕生は、戦後の昭和21年（1946年）に日本の教育の民主的改革を推進するため、米国教育使節団が、ＰＴＡについて述べたことに端を発し、文部省がこの発足を奨励したことから、各学校にＰＴＡが結成されることとなった。

本校においても、戦後の新しい教育制度への転換を図るため、その方針に従って昭和22年に設立準備会を発足させ、同年９月10日に大歳小学校ＰＴＡを創設し、初代会長に藤村福美氏を選出し、会則の決定と役員を選出した。こうして、ＰＴＡは、児童の健全な成長をはかることを目的として、親と教師が協力し、学校及び家庭における教育に関し理解を深め、その教育の振興につとめる団体として第一歩を踏み出した。

２．ＰＴＡ活動のあゆみ

（昭和20年代）

戦後の物資不足の中ではあったが、昭和25年に制服を定め、ＰＴＡ会員の理解と協力を得て翌年から漸次導入実施された。26年運動場拡張について、山口市長に陳情、しかし実施には至らず。27年より校舎改築の準備がはじめられ、28年には西校舎が移転、改築され、29年11月に地域、ＰＴＡ、学校総力をあげて取り組んだ２階建て新校舎（文部省モデル校舎）が竣工。

（昭和30年代）

昭和31年、学校林（山口市大字中尾字出水）において新校舎建築記念植林（杉2,000本、檜500本）をはじめ、アップライトピアノ、観察池、玉いぶき等の寄贈又禽舎の建築等に取り組み、教育施設、環境の一層の充実へ向けて協力を行った。39年３月にはＰＴＡ会報誌「おおとし」の前身である「大歳校報」第１号を発刊し会員へのＰＴＡ活動の啓蒙普及に努めた。又同年９月には、明年開校70周年を迎えるにあたり、創立70周年記念事業実行委員会を発足させ、11月に委員８名により、市当局に対して、プール新設の陳情を行った。

（昭和40年代）

創立70周年記念事業として、昭和40年７月にプールが竣工、又記念植樹をはじめ、各種教育器材、備品の寄贈等により教育環境のより一層の充実が図られた。42年には大歳小が視聴覚先進校として指定されるにあたり、テレビ委員会を結成、テレビの購入から設置に至るまでＰＴＡが推進し全教室に設置を見る。44年の日曜参観日にはスポーツによる親睦をはかるため第１回バレーボール大会を開催、以後約10年にわたり続けられた。45年からは、不用品リサイクルのためのバザー「友愛セール」を実施、平成４年以降は「大歳まつり」において実施継続中である。又ＰＴＡ有志と教職員児童達で続けられてきた学校林の手入れは、47年を最後に林野委員に管理を移管。

（昭和50～60年代）

ＰＴＡ研修視察、教養講座、スポーツによる親睦等の外、母子水泳教室やプール開放に伴う救急法講習会また交通安全教室、性教育、同和教育等への取り組みがなされた。

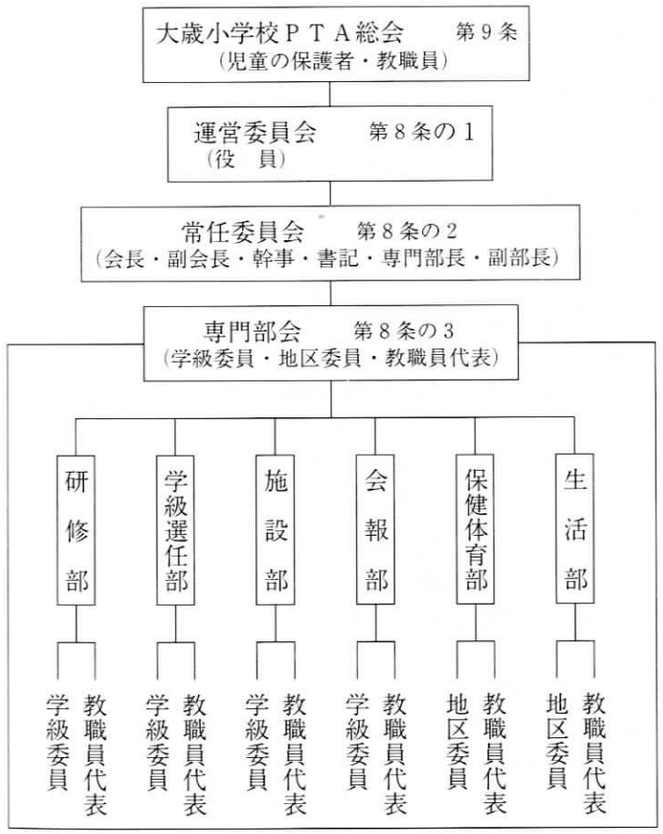
通学路の交通事情の悪化に伴い、交通安全対策について、市への陳情を行うも実現は難しく、保護者・児童に対する交通安全意識の昂揚に努めた。しかし、昭和61年７月、１年生女児の交通死亡事故が発生、これを機に、全会員の賛同を得て、男子のみの制帽を男女ともに黄色の安全帽着用となる。

（平成元年～現在）

ＰＴＡ会員の資質や意識の向上或は活動を、幅広く又より強い連携のもとに行動するため、平成５年５月の総会において規約や組織を改正。平成６年６月に大歳小最後の木造校舎（文部省モデル校舎として昭和29年建築）のお別れ会実施。又同年には環境整備の一貫としてＰＴＡ作業により扇型の花壇（２か所）を設置。

昭和60年代に入り、来るべき100周年にむけ、ＰＴＡ特別会計を設置し友愛セール等のバザー益を100周年に有効に利用すべく積み立てを実施。平成６年度と７年度の２か年で創立100周年記念行事として120万円を拠出。

３．ＰＴＡの組織（平成５年５月17日改正）



運営委員

会　長	１　名
副会長	３　名
監　事	３　名
顧　問	１　名
参　与	１　名
幹　事	１　名
書　記	２　名
会　計	１　名
学級委員	各学級より３　名
地区委員	各地区より２名以上
教職員代表	若　干　名

専門部の活動内容

1）**研　修　部**（会員の教養と親睦を深めるための研修活動）
- ＰＴＡの研修企画、推進
- ＰＴＡ図書の購入と読書活動の推進
- 学級、学年活動への協力

2）**学級専任部**（学級、学年内の連携と自主的なＰＴＡ活動の推進）
- 学級、学年ＰＴＡ活動の企画、推進

3）**施　設　部**（学校環境や教育施設の整備充実とその基盤となる財政確立）
- 環境整備、施設充実に関する協力と企画
- 財政確立に必要な事業の企画、運営

4）**会　報　部**（広報活動を通じ、会員の連帯感の昂揚・学校行事記録への協力）
- 会報「おおとし」の内容研究、編集発刊

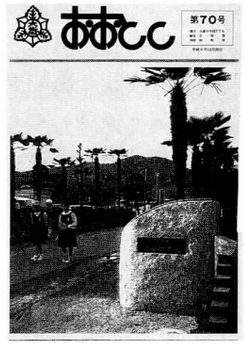
5）**保健体育部**（体育的行事への参加・学校保健委員会への協力などを通して親と子の心身の健全な育成）
- 児童の保健、給食、プール開放への協力
- 体育的行事への参加協力
- 学校保健委員会への参加

6）**生　活　部**（児童の問題行動を未然に防止するため家庭、地域の協力体制を強化し、健全で安全な生活環境の醸成）
- 児童の校外生活についての健全育成
- 交通安全対策、交通指導の企画推進
- 各地区こども会への協力と助言

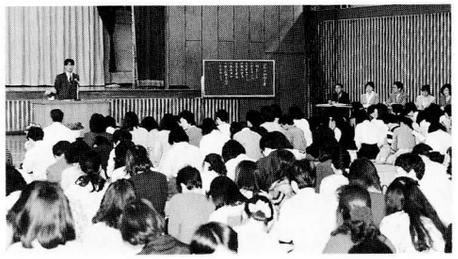
4．歴代のＰＴＡ会長・副会長

年度	会長	副会長		年度	会長	副会長	
昭和22	藤村福美			47	坪郷典男	田中久二	久芳照子
23	〃			48	松田義忠	〃	関光政子
24	〃			49	〃	〃	〃
25	石崎順一		村上藤子	50	〃	銭村幸二	多田惇恵
26	〃		〃	51	〃	〃	〃
27	田中頼三		〃	52	山本　宏	山根信也	〃
28	〃		〃	53	〃	〃	小島和子
29	〃		〃	54	〃	〃	〃
30	〃		〃	55	山根信也	倉重博徳	今野章子
31	光井亘人	児野　隆	〃	56	〃	〃	三浦公子
32	〃	〃	〃	57	秋田利男	村上元龍	野々村寿代
33	〃	〃	〃	58	〃	金子良満	岩田崇乃
34	〃	〃	〃	59	〃	〃	〃
35	大谷猛夫	石光利雄	〃	60	国田博信	中野秀之	藤村芳子
36	〃	〃	〃	61	中野秀之	武波哲雄	〃
37	平川英夫	〃	吉富キク	62	〃	〃	川原敦子
38	〃	〃	〃	63	〃	〃	〃
39	〃	〃	〃	平成元	武波哲雄	藤村文郎	〃
40	〃	〃	〃	2	〃	平原万里	宮成眞澄
41	光永邦彦	坪郷典男	〃	3	林　正則	瀬川秀明	〃
42	原田正弘	久芳満徳	別能貞代	4	〃	〃	〃
43	久芳満徳	藤田富士	〃	5	〃	多田宏之	宮成眞澄・山本詳子
44	〃	〃	〃	6	多田宏之	藤井　盛	〃・〃
45	藤田富士	坪郷典男	〃	7	〃	〃	〃・〃
46	〃	〃	〃				

ＰＴＡの活動



会報誌コンクールに入賞（平成６年度）

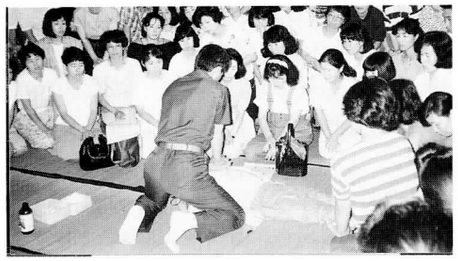


ＰＴＡ総会（平成７．５．21）

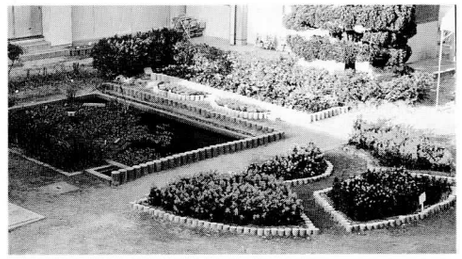
ＰＴＡコーラス校内音楽祭に参加（研修部）

学級ＰＴＡ活動（学級専任部）

友愛セール（施設部）



救急法講座（保健体育部）



中庭の花壇づくり（平成６年５月）

公民館の活動について

大歳公民館主事　徳　光　直　之

1．公民館の沿革

公民館の歴史は戦後にはじまる。しかし、「公民館」という名称は、すでに昭和７年の社会施設構想（菅原亀五郎「理想郷土建設の五型」）に使われており、現実には、昭和16年に公民館と命名した施設（水沢市「後藤伯記念公民館」）が出現している。

今日でいう公民館は、終戦後の混乱した世相の中から立ち上がろうとする人びとの建設の意欲を背景として発足したもので、わが国独自の公民館構想がはじめて文部省から提唱されたのは、昭和21年７月５日付けの文部次官通牒「公民館の設置運営について」であった。

この通牒は、「公民館のしおり」として一般に周知された。

当時の公民館の目的は、すべての国民が豊かな文化的教養を身につけ、他人に頼らず自主的に物を考え平和的に行動する習性を養うことである。そして、これを基礎として盛んに平和的産業を興し、新しい民主日本に生まれ変わることであった。

戦後50年、日本経済は大きく成長し豊かな暮らしが出現している今日、公民館活動が生涯にわたって自由に楽しく学習する場と変わってきているとき、公民館50年史の中にも大きな時代の流れを反映しているといえる。

2．大歳公民館の歴史

山口市公民館条例が施行される１年前、昭和24年５月６日に第１回大歳公民館設立準備委員会がもたれ、同月14日に大歳公民館規約が成立し、山口市大字矢原1413の４番地の旧大歳青年学校校舎に大歳公民館が設置された。同時に公民館常任委員13名が選出され、同年８月に小学校長を初代館長に選出するとともに各委員は教養部、図書部、産業部、集会部に所属する仕組みで公民館活動が始まり、同９月23日に開館式を兼ねた公民館大運動会が開催された。公民館が設置されたとはいっても、当時運営資金は皆無の状況であったため、最初の事業として有料で公民館映画会を開催し、４千円の収入を得てこれをもとに各種の講座や体育、娯楽等の行事が行われた。

公民館の建物は、昭和８年３月に大歳村実業公民学校実習場（70坪）として建てられたもので、戦後は化け物屋敷のように荒れていたが漸次整備されていった。しかし、その後次第に建物が老朽化するとともに敷地が私有地であり、地主から返還を迫られていたこともあって公民館改築の気運が高まり、昭和34年11月５日に公民館建築準備委員会が結成され、市へ再三陳情、ようやく38年度になって改築が決定し、出張所南隣の敷地に集会室、和室、調理実習室、図書館、事務室を備えた木造平屋建216.6㎡の公民館が建築される運びとなり、同年６月24日に起工式が行われた。（山口市教育委員会30年のあゆみより）

現在の公民館は、昭和57年７月24日に公民館出張所建設委員会を設立、小学校周辺であること、旧矢原街道筋であることが適地ということで現在の土地の地権者と交渉、58年６月に用地を取得した。その後、市へ建設促進方を陳情し続け、昭和61年３月に

ようやく建築が決定。同年８月建築工事に着工、翌年３月に工事完了し、同月28日に祝賀会が開かれた。

3．大歳公民館行事の歴史

昭和24年度　・５月６日第１回公民館設立準備委員会開催　・５月14日公民館規約を制定　・９月23日開館記念公民館大運動会開催　・11月25日「大歳公民館」第１号を発刊　・12月４日大歳デー（農産物品評会、のど自慢、演奏会）始まる　・１月15日成人祝賀会を開催　・婦人講座、青年講座、一般講座を開設

昭和25年度　・夏季講座、冬季講座を開設　・11月３日部落対抗野球大会始まる

昭和27年度　・両親（ＰＴＡ）講座を開催　・囲碁大会始まる

昭和28年度　・５月23日バレーボール大会開催　・オート三輪講習会　・母と子の会

昭和29年度　・青年学級を開設

昭和30年度　・謡曲講座、柔道講座、囲碁講座を開設

昭和32年度　・８月25日部落別親睦ソフトボール大会開催　・３月16日地区駅伝競走大会始まる　・大歳公民館後援会設立（当時１戸10円の会費）

昭和33年度　・11月５日公民館建築準備委員会発足

昭和34年度　・５月３日第１回大歳地区体育大会が始まる　・９月30日大歳地区結婚改善実施要項ができる

昭和35年度　・２月１日大歳地区青少年健全育成協議会発足　・３月23日大歳地区子ども会育成連絡協議会が結成される

昭和36年度　・５月28日第１回子ども会ソフトボール大会始まる

昭和37年度　・８月23日大歳としよりクラブが発足

昭和38年度　・６月24日公民館改築起工式　・10月10日公民館改築落成式を挙行

昭和39年度　・手芸グループ発足　・３月16日模擬公民館結婚式を実施

昭和40年度　・家庭教育学級を開設　・８月29日第１回水泳大会始まる

昭和41年度　・生け花講座、盆栽講座、家計簿講座を開設

昭和42年度　・生活学校を開設

昭和44年度　・囲碁講座、謡曲（小謡）講座、栄養学級を開設

昭和45年度　・坂東集会所において同和教育活動が始まる

昭和48年度　・バレーボール教室、バドミントン教室を開設　・楽焼講習会を開催

昭和49年度　・着付教室、育児学級を開設

昭和50年度　・11月23日第１回大歳地区文化祭が始まる

昭和51年度　・菊づくり講座、和裁教室を開設

昭和52年度　・４月13日大歳小学校施設連絡調整会議が発足　・スポーツクラブ（卓球・バレーボール・バドミントン）発足　・11月６日菊花展を開催　・俳句俳画教室を開催　・大歳公民館だよりNo.１発行

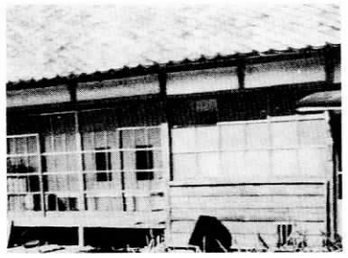
昭和53年度　・大歳地区卓球・バレーボール・バドミントン大会始まる

昭和54年度　・ママさんコーラス講座、書道講座開設　・吉敷、平川、大歳３地区合同青年仲間づくり教室　・10月21日大歳地区ファミリーフェスティバル開催

昭和55年度　・第１回大歳スキー教室開催　・大歳スポーツ連絡協議会発足
昭和56年度　・第１回大歳地区内職場対抗ソフトボール大会開催
昭和61年度　・大歳地区同和教育推進協議会設立　・大歳体育振興会設立
昭和62年度　・大歳夏まつり始まる　・第１回女子ソフトボール大会開催
昭和63年度　・大歳地区文化団体連絡協議会発足　・岸本文庫発足　・現公民館落成式
平成元年度　・大歳地区ふるさとまちづくり事業推進協議会設立　・第１回大歳地区文化団体連絡協議会ミニフェスティバル開催
平成３年度　・青少年健全育成推進大会大歳地区開催　・大歳小学校夜間照明８月より開放　・市民体育大会Ａブロック大歳準優勝
平成４年度　・第１回三世代交流ゲートボール大会開催
平成５年度　・大歳ビデオライブラリー推進協議会設立　・学校週５日制推進協議会設立
平成６年度　・大歳文化講演会（国際化シリーズ５回）開催　・同和教育推進大会開催
平成７年度　・公民館前庭全面舗装

４．歴代大歳公民館長

初代	斎藤　潔	Ｓ25．４～Ｓ28．５	校長兼任
２代	中村本彦	Ｓ28．５～Ｓ31．４	専任・非常勤
代行	藤田健介	Ｓ31．４～Ｓ31．５	
	中村本彦	Ｓ31．５～Ｓ32．３	専任・非常勤
３代	光永邦彦	Ｓ32．４～Ｓ43．９	専任・非常勤
代行	渡辺良雄	Ｓ43．10～Ｓ43．10	
４代	安富俊雄	Ｓ43．11～Ｓ48．２	専任・非常勤
５代	三井亘人	Ｓ48．４～Ｓ50．４	専任・非常勤
６代	武波貞義	Ｓ50．５～Ｓ54．２	専任・非常勤
７代	藤田健介	Ｓ54．２～Ｓ54．11	出張所長兼任
８代	渡辺良雄	Ｓ54．２～Ｓ54．11	出張所長兼任
９代	上川　巍	Ｓ58．２～Ｓ60．２	出張所長兼任
10代	藏成秋次	Ｓ60．２～Ｓ63．３	出張所長兼任
11代	小林洋一	Ｓ63．４～Ｈ３．３	出張所長兼任
12代	山本武彦	Ｈ３．４～Ｈ４．３	出張所長兼任
13代	井上　斌	Ｈ４．４～Ｈ６．３	出張所長兼任
14代	國吉武志	Ｈ６．４～	出張所長兼任


発足当時の公民館
（旧青年学校・藤田健介氏提供）

旧公民館

現公民館

留守家庭児童健全育成対策「さわやか学級」

指導員　山　本　詳　子

１．背　　景

児童の生活は、家庭、学校、社会の中で営まれますが、家庭は児童の健全育成の場として最も重要であり、児童の養育に対する親の責務は極めて大きいといえます。

また、学校は児童を教育する上で家庭や地域との協力関係が不可欠です。

さらに、遊びを通して児童が成長する場としての地域社会も、健全育成に重要な役割を果たしています。

しかしながら、近年は都市化の進展、核家族化の進行および女性の社会進出の増大等に伴い、児童をとりまく環境は複雑多様化してきており、昼間保護者のいない家庭の児童は増加しつつあります。

さらに、地域社会の人間関係は希薄化してきており、加えて少子化に伴う児童の減少は地域の中で仲間集団を形成することを困難にしています。

こうした社会情勢の中で、保護者の就労等により保護育成が必要な児童に、下校後の生活指導を通して心身の発達を援助するために生まれたものが、留守家庭児童学級です。

大歳地区では、略称を「さわやか学級」と呼んでいます。このさわやかの名称は小学校の校歌の一節「朝の光ださわやかな」からつけられたものです。

２．経　　過

平成３年７月22日、大歳小学校内に開設。

さわやか学級入級者数（定員30人）

平成３年度	12人		
平成４年度	23人	指導員	山本詳子
平成５年度	33人	〃	松本光代
平成６年度	31人		（平成７年10月１日現在）
平成７年度	22人		

３．運営主体

山口市の委託を受けて、大歳地区留守家庭児童学級運営協議会が運営しています。

協議会委員の構成

大歳地区社会福祉協議会長・大歳小学校校長・大歳小学校ＰＴＡ会長・大歳地区青少年健全育成協議会長・大歳地区子ども会育成連絡協議会長・大歳地区民生委員児童委員協議会総務・大歳地区主任児童委員・大歳地区福祉員協議会長・大歳自治振興会長・同婦人部会長・大歳地区ボランティアの会会長・大歳地区選出の市議会議員・保護者会会長及び副会長・学級指導員

４．入級資格

小学校１年生から３年生までの児童で、①両親が共働きの家庭で育成に欠ける者。②母子、父子家庭で育成に欠ける者。③その他の理由で育成に欠ける者。

さわやか学級では、これからも保護者の方々が安心して働けるよう、学校、地域の皆様そして保護者との緊密な連携のもとに、子供たち一人ひとりの個性を大切にし、すなおでおもいやりのある子供に成長するよう学級づくりを進めたいと思います。

大歳地区子ども会

大歳地区子ども会育成連絡協議会会長　藤　川　孝　和

1．大歳地区における子ども会の誕生

日本中が列島改造論にはじまる高度成長を続けた昭和45年頃、物質的には充足されてきても、反面、子ども達をとりまく環境に様々な影響が出始めていた。そういう背景の中で子ども達の健全育成を目指し発足したのが“子ども会”である。

昭和49年には、社会教育の一貫として行政面からのバックアップもあり、各地区で活動が急速に活発化してきた。大歳地区においても、地域の支援のもと中学生をリーダーとして種々の活動が行われ、子ども同士は勿論、親子或は親同士のコミュニケーションの場としておおいに生かされ、今日まで発展継続してきている。

2．主な活動内容

⊙球技大会――男子のソフトボール、女子のフットベースボール大会、夏休み前から子ども達は勿論、大人もおおいに燃えた。揃いのユニホームもなくまちまちのチームスタイルで道具も貸し借りで地区大会に備え、その中で仲間同士の団結・思いやりが育てられていった。バケツに入れた氷水を運び、お母さん達が結んだ握り飯、子どもを中心に地区が一体となり実施されてきた。

⊙野外キャンプ――昭和52年夏が最初の試みで、小学校４年生～中学校３年生60～70名を対象に、中矢原河川公園で催された。仮設トイレの設営から食事の準備まで、お互いが智恵と力を出し合っての大奮闘で、子どもと大人が一緒になっての楽しい想い出である。その後、公民館のお世話によりキャンプ用主要器材（テント・炊事用具）が揃えられ、会場も大歳小学校グラウンドに移り、５～６年続けられた。

⊙凧つくり、凧あげ――旧公民館木造建ての集会場の板の間、冬の真っ最中、青竹割り、ヒゴ造り、糊拵え、和紙・障子紙へ各自の絵書き。老人会のお手伝いをいただき、寒さを忘れての自作、操つり糸付け。凧あげ当日は、前夜からの雪景色、矢原河川公園会場の土手に立って、寒風に糸もつれを気遣いながらの凧あげは、三世代交流の成果であった。

⊙花いっぱい運動――各単位子ども会の花壇に、親子一緒の土作りから始まり、苗の植え付け、草取り、水やり等手入れをしながら育てる。協力することによって、花を育てる楽しさを知り豊かな心を育て、地域のふれあいの輪を広げてきた。

⊙しめなわづくり――三世代交流を目的とし、老人クラブの方々に御指導をいただき、子ども達は慣れぬ手つきで挑戦している。

⊙廃品回収――資金作り、資源の再利用等を目的とし行われてきた。物の大切さを少しでもわかってもらえるように、親子共々頑張っている。

⊙秋のリクリエーション・サイクリング――自然に触れ、楽しみながら野外学習を体験することができ、参加者も年々増えている。

3．おわりに

現在大歳地区には、20の単位子ども会があるが、子どもの数の減少にともない十分な活動ができない地区もある。しかし、子ども達の自発性や創造性を生かした自主的運営を周囲がしっかり支えて、先輩たちの築いた伝統を継承してゆきたい。

子ども会活動を通して、子ども達が地域のすばらしさと仲間の連帯を体感し、生かしていけたら良いと思う。

大　歳　太　鼓

大歳太鼓保存会会長　藤　村　彰　一

澄み切った空に響き渡る和太鼓の音。激しく、そして時には弱く…郷愁を誘う。鉢巻きに法被（はっぴ）姿もりりしく、懸命にバチを振るう子ども達の姿である。

この「大歳太鼓」サークルが発足したのは、昭和62年７月だった。折りしも地域活動として“ふるさとづくり”という言葉が盛んにいわれ、各地で「ふるさと」を意識づけるための特色ある取り組みが試みられていたころである。当時、大歳地区青少年育成連絡協議会会長の国次薫氏も、子ども会の手で地区として誇れる活動はないものだろうかと模索されていた。そのころ、大歳在住の原田栄さんが作曲された「大歳のリズム」という和太鼓のリズムに出会い、このリズムを基に子ども達による和太鼓サークルの結成が提案された。

こうして、子ども太鼓の組織づくりが進められ、和太鼓の伝統の継承を通じて子ども達の健全育成を願い、地域が一体となって育てようと、その名も「大歳太鼓」と命名された。

早速、指導者に「大内姫太鼓」所属（現在はふしの川太鼓）の重富美沙緒、吉本恵美両先生（大歳在住）をお迎えし、子ども会全員の中から、太鼓に興味のある子を募り、小学生９人、中学生９人の18人でのスタートであった。「大歳太鼓」の誕生である。

練習は月２回、日曜日を利用して練習に励んだが、発足当初は太鼓が買えないため地区内外から醤油樽の寄贈を受けて、これをたたいての練習が続いた。

こうした子ども達のひたむきな姿に、何とか太鼓を購入してやりたいと発議され、同年８月、藤村彰一を代表に「大歳太鼓基金」（目標100万円）の募金が始められた。平成元年10月には目標の積み立てを完了し、大太鼓４張、小太鼓10張を購入。法被（はっぴ）も揃えて本格的な演奏活動を進めている。

〔活動の概要〕

- 地域行事への参加
  地区運動会・大歳夏祭り・敬老会・大歳祭りへの出演
- 施設への慰問
  老人ホーム・刑務所・福祉施設等
- 各種イベントへの参加
  各方面の出演依頼には可能な限り出演

発足以来９年、年を増すごとに活動範囲を広げている。

なお、太鼓基金がその目的を終了した時点で、この「大歳太鼓」を永く後世に伝えようと、新たに「大歳太鼓保存会」が設けられた。この保存会は、子ども太鼓に対する大歳地区内外の多数の理解者・協力者によって組織されるものであるが、今後とも地域のみなさんの限りないご支援をいただき、より一層盛り上げていきたいと願っている。

大歳地区スポーツ少年団

1．伸びよ　大歳サッカースポーツ少年団

監督　石　井　貫太郎

山口市のサッカースポーツ少年団の歴史は古く、昭和44年11月に各小学校の体育主任の先生を中心に20チームが結成されたと記録されています。

大歳サッカースポーツ少年団もこの時期、初代監督の井上元信先生を迎え活動を開始しました。そして、昭和48年から52年に至り、山口教員団ＯＢの沖田・梶原両監督の時代には、近辺の各種大会で優秀な成績をあげるなど、まさに大歳サッカースポーツ少年団の黄金期でした。

昭和58年に私が監督になって今年で13年目になりますが、この間団員も３年生から６年生まで常に100名を超える盛況です。

練習日は毎週火・木・金曜日。大歳小の上田先生とともに、基礎体力・技術向上を目的としながら、スポーツをする楽しさも大切にして指導しています。

子供達はいつも

- サッカーでたくさんの友達ができた。
- サッカーで一杯、汗をかいた。
- サッカーがうまくなった。
- 試合に勝てて、うれしかった。

と、サッカーに対する喜びを率直に語っています。

私は、今あらためて、子供達にサッカーをとおしてスポーツをすることの楽しさ・喜びを体感させ、真に充実した小学校生活をすごして欲しいと思っています。

「サッカーの思い出」

Ｈ７年卒業　難　波　勇　太

ルールも知らずに始めたサッカーも今では審判もできるようになりました。

学年が上がるにつれ、サッカーのプレーも上達していき、その成果が問われる６年生のとき、村田杯と６年生大会で優勝して、言い表しようのない満足感で一杯になりました。この満足感を味わうことができたのも、指導して下さった監督、先生方のお陰です。どうもありがとうございました。僕達はこれからも大好きなサッカーを続けていきます。

2．大歳野球スポーツ少年団

監督　玖　村　克　由

大歳野球スポーツ少年団は、昭和54年４月に結成されました。子ども達に何か楽しい事をさせてあげようということで、地域の人達が中心になって発足しました。その頃は60人の子どもが在籍し、野球が楽しいスポーツとして子ども達に最も人気があったのです。

昭和60年、第１回山口新聞社旗争奪少年野球大歳大会を主催し、以来毎年４月に大会を開催してきました。昨年は第10回記念大会を迎えることができ、今年も４月２日、４月９日と山口市椹野川運動公園で、第11回大会を無事開催することができました。過去、市内８チームの参加から始まり、現在では市内をはじめ、市外のチームへも参加を呼びかけ、32チームが参加する大会になりました。この様な大会は、大歳野球スポーツ少年団父母の会という充実した後援体制のもとに支えられています。

現在、市内に野球スポーツ少年団は11チームあり（小郡少年野球団を含む）、大会やリーグ戦、練習試合、また駅伝大会を通しての交流は益々盛んになっています。この間、大勢の子どもたちが卒団していきました。野球を続ける者、野球を通して培われた身体と精神で新しいことに挑戦していく者、さまざまですが社会人としての立派な成長は、これまで団に携わってきたすべての人達にとってたいへん喜ばしいことであり、当時の苦労は良い思い出になっていると思います。

大歳野球スポーツ少年団の指導方針は

1　大きな声でハッキリと挨拶をする。
2　ルールを守り、他人に迷惑をかけない。
3　友達を多くつくり、大切にする。
4　最後まであきらめずに頑張る。

この４つを重点目標とし、スポーツ少年団活動に取り組んでいます。また、試合をする以上勝つことを目標に競技的な野球を目指しています。したがって、練習は厳しいものになりますが、上手にできたプレー、フェアーなプレーに対しては誉めるよう心掛けています。練習は毎週水・土・日曜日の週３回、大歳小学校グラウンドで行っています。試合数は練習試合も含め、年間30～40試合。試合では日頃の厳しい練習の成果が十二分に発揮できるよう元気一杯練習に取り組んでいます。チームの和と全員野球ができた時、はじめて勝つことができると指導しています。

大歳野球スポーツ少年団は結成以来、常に上位の成績を残してきました。ここ数年は市内に限らず県内でも活躍が知られ、各地から招待試合の案内が送られてくるようになりました。現在指導している私、コーチ、父母の会の皆様も、この様な立派な大歳野球の伝統をより一層高めるよう、団員と一緒に頑張り、後輩たちに引き継ぎたいと思っています。

平成六年度成績

全日本学童選手権大会　　山口市代表
　　山口県ベスト８
山口県知事杯少年野球大会　山口市代表
　　山口県準優勝

3．大歳フットベースボールクラブ

監督　渡　辺　勇　雄

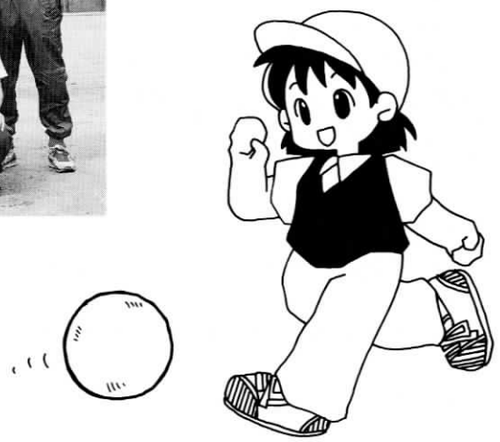
軟式野球やサッカーなど男児を主体のスポーツが中心となる中で、何とか女の子にもスポーツの場を開きたいと、昭和56年にフットベースボールクラブの結成を思い立ち、大歳地区全体から希望者を募り、クラブチームとしての発足でした。

スタート時は、指導者８名、クラブ員30名。毎週日曜日の午前中を練習日とし、基礎体力づくりから始め、競技がチームプレーを重視することから、『仲良く、元気に』をモットーに指導してきた。平素の練習も、投げる・蹴る・走るの技術向上はもちろん、挨拶のきちんとできる子ども、優しい子どもに育つことを願って、素人指導者ながら父母の皆さんの協力を仰ぎつつ、子ども達の成長を見守っている。

最近の活動状況は、年に数回、他地域チームとの交流試合を積極的に行い、地区子ども会主催の大会にも単位子ども会として参加し、優秀な実績を残している。

選手の皆さんが成長し中学生・高校生、また社会人となって、各方面で幅広く活躍している姿に接することは指導者として嬉しい限りである。これからも、練習・試合にとどまらず、レクリエーションにも力を入れ、思いやりや、協力することの大切さを身につけさせるため、体育祭・夏祭り・秋祭りには親子で参加してもらい、ＯＧ達の手伝いもいただいて親睦の輪を拡げていきたい。

しかし、時代を反映してか、部員数は減少気味である。今後、一層楽しいサークルを目指して部員をふやしていかなければならない。彼女らが小学生時代の懐かしい想い出として、いつまでも心に残るようなクラブ活動へ定着することを願って止まない。



4．大歳バレーボールスポーツ少年団

監督　山　根　一　男

ア　団結成の経緯

平成６年７月14日、大歳地区で５番目のスポーツ少年団として結成された。

そもそも、当地区のバレーボールに対する関心は高く、数年前から子供たちにもバレーボールをさせたいということが話題にのぼることがあった。また、小学校の体育の学習でもバレーボールを導入しようとする動きがあったり、生涯学習社会の中で、特に地域のスポーツとしてのバレーボールの役割が指摘されたりする中で、少年期における多様な運動種目との出会いを提供していくことが必要であるとの認識が高まり、近年地区の内外からバレーボールスポーツ少年団の早期設立の要望を聞くようになった。

このような状況を踏まえ、大歳バレーボールスポーツ少年団の結成のために、山根一男・和田康夫・平田牧子・山本詳子の４人が準備委員会を組織し、大歳公民館を通じ結成のための準備を始めた。それを受けて、７月に、当地区に在住する４年生以上の女子に募集要項を配布し、６年生５人、５年生４人、４年生６人の計15人の団員と指導者４人（上記の準備委員）に加え、団全体運営を担当する団長として山本宏を決定し、発足に至った。

イ　大歳バレーボールスポーツ少年団の運営

- 対　象　大歳地区に在住の３年生以上の女子（平成７年度から３年生以上とする）
- 練習日　毎週火曜日・金曜日・土曜日の17時～19時
- 場　所　大歳小学校体育館
- 活　動　バレーボール、レクリエーション活動を中心に
- 団　費　年間4,000円（登録料・保険料を含む）

ウ　大歳バレーボール少年団の組織

団長 ┬ 指導者
　　 ├ 団　員
　　 └ 育成会（団員の保護者）

エ　結成１年を迎えて

初めは、声も出ず、サーブも満足に打てなかった団員たちも、試合を経験する度に他地区のスポーツ少年団員の影響を受け、ボールをつなぐ楽しさを味わえるようになってきた。平成７年度は、３年生以上を対象にしたため、19人の新団員を迎え、体育館が狭くなったような錯覚さえ起きる。幸いにも３人の中学生がリーダーとして登録をし、３・４年生の指導の補助に当たっているので、理想的な団活動になりつつある。

スポーツ少年団としての精神を大切にしながら、スポーツを通して「頑張り抜く気力と体力」さらに、団員同士・団員と指導者の人間的なつながりを大切にしていきたいと考えている。「試合の結果よりも自分たちの納得いくプレーをしたい」を合言葉にしながら。

5．大歳剣友会

代表指導者　伊　藤　　章

大歳剣友会は、平成元年６月に地域の有志の方々のご支援により発足することができ、今年で７年目を迎えることになりました。現在では、地域内の指導者５名と小学生から中学生をはじめ、ＯＢの高校生を含め42名で稽古に汗を流しています。

剣友会では、「剣道は剣の理法の習錬による人間形成の道である」という剣道の理念をもとに、「地域に奉仕できる健全な少年の育成」を目標に、剣道を通じて身体を鍛えるだけでなく、心豊かな少年を育成することを目的としています。会の構成も、小学校１年生から高校生２年生といったように、他のスポーツ少年団では見られない幅広いもので、地域のジュニアリーダーを育成して、地域活動に十分に反映させようと思っています。

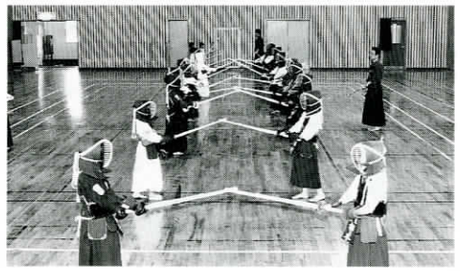
活動は大歳小学校体育館で、週２回（水曜日～午後６時から午後７時30分、日曜日～午後５時30分から午後７時）の稽古を行っているほか、その成果をみるために山口市内の大会をはじめ、県下の大きな大会及び県外の大会等年間10試合程度をメドに剣道大会に参加しています。試合成績は、発足当初「出れば負ける」というのが常でしたが、指導方針の「基本が第一、結果は二の次」が功を奏したのか、最近では県内でも最大規模の大会である錦兜争奪長門剣道大会の団体中学生の部で、昨年・今年と２年連続３位の好成績を上げるほか、市内外の大会でも上位に入賞するようになりました。

また、保護者を中心とした後援会活動も活発で、子供達の活動をはじめ、夏季キャンプ、クリスマス会、卒業お祝い会等の行事には、一致団結しての援助活動にあたるほか、夏祭りや大歳祭り等の地域行事にも積極的参加を続けており、保護者間の輪とコミュニケーションの良さには目を見張るものがあります。

武道では、従来から「礼に始まって、礼に終わる。」ということがよく言われていますが、これは他のスポーツにも言えることです。常に相手に対する「お願いします」「ありがとうございました」という気持ちが大切で、剣友会ではその姿勢、態度にも重点を置いています。夕方剣道着を着た子供達を見受けられることがあると思いますが、悪いところがあれば注意してやって下さい。地域の方々の一人一人が指導者と言った地域作りが大切な子供達の育成方法と思っています。

剣友会は、発足当初からスポーツ少年団に加盟しておりましたが、従来からの懸案でありました剣道連盟にも加盟し、剣道道場としても、自他ともに認められるようになりました。

剣道指導者の一人として「剣道は生涯スポーツの最たるもの」と自負しております。剣道は老若男女を問わずにできるスポーツで、指導者及び剣道をやりたいという子供達をお待ちしております。



最後に、地域の皆様のご声援によりまして、剣友会の活動を益々盛り上げていただきたいと願っております。

第５章　思　い　出

思い出の石津橋

この章は、卒業生や先生方に在校当時の思い出を綴ってもらいました。ページの都合で、ごく一部の方々の登場となりましたが、寄せられた幼き日の話題は、いずれも共通の思い出ではないでしょうか。あらためて郷愁のよすがになればと期待しています。

なお、卒業生・先生方を別枠としないで、すべての稿を関係された年次順に並べました。